

書評

三恵社 刊

患者さんに顔のみえる 病理医からのメッセージ —あなたの「がん」の治し方は 病理診断が決める！—

著者 堤 寛

● A5判, 186頁
定価1,600円(本体1,524円+税5%)



わけだ、著者の考えでは、病理医もりっぱな医師なのだ、なぜなら、病気のなりたちやがんの性格についてよく知っている病理医が、病理標本を介して患者さんにわかりやすく説明し納得するまで話をすることによって、患者さん自身が主体的に医療に参加する(病氣と戦う)手助けができるからである。病理標本は特殊染色を含み、たくさん客観的事実の宝庫であり、それを解釈したり説明できる適任者は病理医をおいて他にない。このような病理医を「患者さんに顔のみえる病理医」と著者は呼んでいる。

さらに、『顔のみえる病理医』は講演会や音楽会などの楽しみを通じていろいろな患者会と交流する(著者は乳がんの患者会と交流を続けている)ことで、病理医の専門知識を一般の人に伝えることも可能だ、著者はオーボエ演奏が得意であることから、病理医を中心としたオーケストラ(日本病理医フィルハーモニー、JPP)を結成しその団長を務めている。2012年4月の病理学会から本格的にJPPの演奏活動が始まった。この活動も病理医と一般人(患者さん)との距離を縮めるのに大いに役立つであろう。

病理医はさまざまな診療科を病理学という共通語で横断的に結びつけることのできる特殊な専門医である(著者のことばを借りれば「穴埋め病理医」とか「スキマ病理医」とも言う)。患者さんに、もっと納得のいく医療を受けてもらうため、そして自主的に医療に参加してもらうために、「顔のみえる病理医」が、病理標本を前にして患者さんの中から寄り添うことが、新しい医療の形の一つとなるように大いに期待される場所である。それゆえ、がんと戦っている勇気ある患者さんや家族の人たち、医学を学ぶ学生たち、病理医を目指す初学者のみならず、今現在第一線で活躍中の病理専門医の方々にもぜひ一読していただきたい。著者からの熱いメッセージ満載の一冊だから。

立山義朗

(国立病院機構 広島西医療センター 研究検査科)

毎日標本と対峙し病理診断を行っている病理医は医師であるが、通常患者さんを診察したり、検査をオーダーしたり、薬を処方したりすることがない。患者さんと直接対面しない病理医はそれでも医師なのか？

この疑問に著者の堤寛氏は本書の中で答えている。

著者は大学の病理学教授で、これまでたくさんの著書を世に送り出してきた。対象は病気に興味のある一般人(患者さん)、医学生やコメディカルの学生、病理学初学者が主であり、難しい病理学用語をやさしく噛み砕いたことばで解説している。本書も同様の構成をとり、初めのいくつかの章で病理診断について、がん細胞について一般人にも理解しやすいように書かれている。次いで病理医が日常行っている病理診断報告書の実際の内容についてもかなり詳細に説明されている。

さて、病理医は医師なのか？という冒頭の疑問に戻るが、もちろん、病理診断は医療行為であり、法律的に病理医は医師でまちがいないが、患者を直接診ないのに医師と言えるのかという実際的なところを問題にしている